

ラフカディオ・ハーンとブルターニュ —ニューオリンズにおけるハーンとフランス民俗学の出会い—

梁川 英俊（鹿児島大学）

はじめに

ラフカディオ・ハーンはよく「ケルト」との関連で論じられる。そのとき枕詞のようについて回るのがアイルランドである。しかしハーンとケルトの関係はなにもアイルランドのみに限られるものではない。事実、ハーンの人生を振り返ると、いまひとつのケルトの土地が浮かび上がる。フランスのブルターニュ地方である。本稿では、これまでハーン＝アイルランドという定式の陰に隠れて見えなかった、ブルターニュとハーンの関係を検証してみたい。

1. ケルトの地アイルランド？

日本人にとってアイルランドは「ケルト」の代名詞である。極東の島国でなぜこのようなイメージが形成されたのかという問題はひとまず措くとして、それが好景気の時代にケルティック・タイガーを自称し、流行のケルト音楽の発信地というイメージをもつアイルランド側の事情とも無関係ではないことは確かだろう。「ケルト」とは、イングランドに支配された歴史を持つアイルランドにとって、ブリテン島とは異なるアイデンティティを表出するための絶好のシンボルなのである。

父親がアイルランド人で、自らも2歳から13歳までアイルランドで過ごしたラフカディオ・ハーンは、しばしば「ケルト人」と見なされてきた。そして、このことが彼の作品や人物の評価に及ぼした影響はけっして小さくはない。

今日ケルト諸語圏に数えられる地域は、アイルランド以外にも、ウェールズ、スコットランド、コーンウォール、マン島、ブルターニュとケルト諸語の残るヨーロッパの辺境地域が広く含まれる。そして歴史的に見て、アイルランドはこれらの地域の中で必ずしも指導的な立場にあったわけではない。

一方、ヨーロッパで「ケルト」がクローズアップされていった19世紀において、フランスが果たした役割は看過し得ぬほど大きかった。たとえばケルト諸語地域の連帯の必要性を説く「汎ケルト主義」の考えを提唱したのは、1864年にフランスで出版された『19世紀のケルト人』(*Les Celtes au XIX^e siècle*)の著者シャルル・ド・ゴール(Charles de Gaulle)である。その発想の源になったのは、19世紀前半におけるウェールズとブルターニュの交流であった。同名のフランス大統領の大叔父に当たるこの人の呼びかけにアイルランドが呼応するのは、1880年代に入ってからであり、この「世界的なケルト同盟」を見据えて、ダブリンで「汎ケルト協会」ができるのは1888年である。そして、アイルランドにおいて「ケルティック・リバイバル」ないし「ケルティック・ルネサンス」と呼ばれる文芸運動が起きるのは、それからさらに後のことである。

アイルランドとケルトに関する固定的なイメージが形成されていくのは、この過程においてであり、日本でもおなじみの妖精や渦巻き模様に彩られたそのイメージには、その後の学問的な成果に照らして修正すべきものも少なくないのである。

ちなみに、アイルランド人の起源を明らかにする最近の分子遺伝学の研究においては、中央ヨーロッパで栄えたケルト人がブリテン諸島に移住したという従来の定説に対して、アイルランド人の先祖はイベリア半島にその起源をもつという説が DNA レベルの鑑定結果から提出されている¹⁾。こうした観点においても、アイルランド人＝ケルト人という定式はけっして自明のものではないのである。

ここでは、アイルランド＝ケルトというイメージを相対化すべく、これまでハーンとの関連をほとんど問われることのなかったフランスのブルターニュ地方を取り上げ、ハーンと「ケルト」との関係に新たな光を当ててみたい。

2. ブルターニュとフランス民俗学

ブルターニュがフランスの民俗学の形成において果たした役割は、きわめて大きい。特に口頭伝承の収集に関しては、ブルターニュに触れずしてその歴史を語ることはできない。

ヨーロッパで「ケルト」という語が普及する端緒となったのは、1707年に出版されたエドワード・スュイド (Edward Lhuyd) の『アルケオロジア・ブリタニカ』(*Archaeologia Britannica*) である。しかしこの語が広く一般に浸透するのは、1760年から1763年にかけてジェームズ・マクファーソン (James MacPherson) が出版した『オシアン』(*Ossian*) によるところが大きい。ハイランドで発見されたケルトの古歌という触れ込みの一連の詩篇は、ヨーロッパ中で熱狂的に読まれたが、その後「贋作」の疑いが生じるとブームも沈静化していった。しかし口承で伝わる太古の歌の残存に対する人々の期待がそれで消え去ったわけではない。特にケルト諸地域においてはそうだった。

たとえば、大革命後にブルターニュを旅して『フィニステール県旅行記』(*Voyage dans le Finistère, 1799*) を著したジャック・カンブリー (Jacques Cambry) は、こう書いている。「太古の偉大な歌は、バルドの没落ととも消えてしまった。私は方々を調べたが、人々の記憶の中にも、過去の写本の中にも、われわれの祖先を勝利に導いたあの壮麗な歌を見つけることはできなかった」。

このカンブリーを中心にして1804年に創設されるのが、フランス最初の民俗学的学術団体「ケルト・アカデミー」(*Académie celtique*) である。そして古謡の採集はそこにおいても重要な目的のひとつとされた。さらにラ・リュ神父 (Abbé de La Rue) によって1815年に発表された『中世におけるアルモリカのブルターニュのバルドの作品に関する研究』(*Recherches sur les ouvrages des bardes de la Bretagne armoricaine dans le Moyen Âge*) は、中世のトルヴェールに大きな影響を与えたブルトン語の詩歌がいまもブルターニュに残るとして、ブルトン人の文学者にその採集を呼びかけた。

それに応えたのが、カンペルレの貴族の子弟ラ・ヴィルマルケ（Théodore Hersart de La Villemarqué）だった。彼が1839年に出版した『バルザス＝ブレイス』（*Barzaz -Breiz*）は、フランス最初の民謡集として大きな話題になった²。

その後1852年から1876年にかけて、公教育大臣フォルトゥール（Hippolyte Fortoul）の主導による国家事業として行われた民謡調査は、海外領土も含めたフランス全土を対象としたが、その過程で民謡概念やその採集方法も厳密化されていった。1868年にリュージェル（François-Marie Luzel）が出版した『バス＝ブルターニュの民謡』第1巻（*Chants et chansons populaires de la Basse-Bretagne*）は、歌い手の名前や採集年月日を明記し、ひとつの歌に数ヴァージョンを掲載するなど新しい方法を採用したが、歌の内容の貧しさから評判は芳しくなかった。リュージェルはまた民話も採集したが、彼の専属の語り手マハリット・フュリュップは、民話を150篇、民謡を259篇記憶していたと伝えられる。

1870年、ゲドス（Henri Gaidoz）によって世界初のケルト学の専門誌『ルヴェ・セルティック』（*Revue celtique*）が創刊される。言語学のみならず、民族学やフォークロアも対象とした雑誌で、リュージェルの民話も毎号掲載された。リュージェルは1872年に『バルザス＝ブレイス』の歌の真正性について』（*De l'authenticité des chants du Barzaz-Breiz de M. de La Villemarqué*）という小冊子を出し、民謡にしては立派すぎるラ・ヴィルマルケの歌集の内容に対して疑義を呈した。

1877年、ゲドスはロラン（Eugène Rolland）と共に「フランスと外国の民衆文学、すなわち民話、バラード、歌、諺、謎、民衆的な祭りや踊り、慣習、伝承、迷信等々」のための新しい雑誌『メリュジーヌ』（*Méluşine*）を創刊する。この雑誌は1877年から1912年までの間にパリで11巻が刊行されるが、刊行は途中まで不定期であった。

そして、『メリュジーヌ』が創刊されたこの1877年、ラフカディオ・ハーンは8年間住んだシンシナティーを離れ、11月にニューオリンズにやって来る。

3. ハーンとフランス民俗学

富山大学附属図書館に勤務した竹若重勝はヘルン文庫についてこう書いている。

神話・民間伝承では、(……) [英語本] の目録分類「神話、民族学など」を見ると、[英語本] 二四冊の内十八冊がJ購入で、日本に来てから購入した本が、七五・〇%を占めている。次に [仏語本] の目録分類「民俗学」を見ると、[仏語本] 七四冊の内七十冊がN購入で、このほうはN購入の本が、九四・六%を占めている。この分野の [英語本] が二四冊あるのに対して、[仏語本] は七四冊で三・四倍にもなり、ハーンは知識・情報の入手を [仏語本] に頼っていた。そうして、ハーンが日本におけるこの分野での資料不足を嘆いていたのがよく理解できる³。

この記述からも明らかのように、ハーンはニューオリンズでフランス語の書物を通して民俗学に出会った。彼はこの学問に関する知識の大半を、フランス語の書物から得ていたのである。では、ハーンは具体的にどのような書物を読んだのか。

ニューオリンズにおけるハーンの読書について手掛りを与えてくれるのは、シンシナティ時代に知り合った友人クレービール (Henry Edward Krehbiel) に送られた書簡である。当時「シンシナティ・ガゼット」の記者であったクレービールは、のちにニューヨークへ移って「ニューヨーク・トリビューン」の音楽主幹となり、音楽研究家・批評家として活躍した。ハーンとの文通は 1876 年から始まり、1890 年 3 月まで続いた。

『メリュジーヌ』との出会い

『メリュジーヌ』はもうお持ちでしょうか？ もしお持ちでなければ、大変に残念です。『メリュジーヌ』には、あの珍しい農民の歌が楽譜付きでたくさん載っていますよ。そのうち幾つかは何百年も前のものです。あなたならたぶん大喜びすると思いますよ。

1877 年、ニューオリンズに到着してまだ日も浅い頃、ハーンは創刊されたばかりの『メリュジーヌ』の情報を手に入れ、クレービールに興奮した調子でこう書き送る。しかし、このときハーンはまだ雑誌の実物は手にしてはいない。『メリュジーヌ』の創刊は 1877 年だったが、実際にそれが雑誌として世に出るのは翌 1878 年のことである。その年の初頭、ハーンはクレービールにこう書いている。

(残念なことに、ニューヨークのクリスターンからいまさつき受け取った情報によると、『メリュジーヌ』は廃刊になってしまったようです。愛しの『メリュジーヌ』、可哀そうに！ 彼女が亡くなったのは、考古学的にも文献学的にも残念なことです。) ブルターニュにはオリエンタがあるのです。そして、その歌はブルターニュの漁村の歌なのです。それがメランコリックな歌であるのは驚くには当たりません。ただしメランコリックなだけで、不気味さや甘美さが無いのは、いただけませんが。1877 年の『メリュジーヌ』は、ブルターニュの歌を楽譜付きでたくさん収録しています。私はクリスターンから「いかがですか」と言われたので買うつもりです。私が欲しいのは伝説が載っているからです。あなたなら、さしずめ楽譜を見るためでしょうね。

ニューヨークの知人から『メリュジーヌ』の購入を勧められて、「買うつもりだ」と書いていることから明らかのように、ハーンはこの時点でもまだ『メリュジーヌ』を入手してはいない。したがって、この書簡中で言及されているブルターニュの漁村の歌は『メリュジーヌ』に掲載されている歌ではあり得ない。前後の文脈が不明なため正確なことは分からないが、それはハーンかクレービールがどこか別の場所で見つけたものであろう。漁村の歌と断っていることから、あるいはハーンが所有する『バルザス＝ブレイス』に収録されている「イスの町の水没」(Submersion de la ville d'Is) ではないかとも思われるが推測の域を出ない。手紙はこう続く。

そのメロディーがアイルランドの哀歌の嘆き節に似ているという私の意見に対する御批判は、予期してはいましたが失望させられました。なぜなら私は、ブルターニュの小作人階級はケルト人の末裔であると信じている

からです。この間のあなたの手紙は「自分の顔が中国人の顔に似ている」という、私がときどき捉われる奇妙な空想をより強固にしました。つまり、モンゴル人とある種のタイプのアイルランド人の顔には著しい類似性があるということですが、人々は彼らが東方のケルト人の遠い祖先だと思っていたがっているようです⁶。

この記述と、前の引用にある「ブルターニュにはオリエントがあるのです」という一文は、当時のケルト観を如実に反映している。つまり 19 世紀において、ケルトとはオリエントだった。この時代、ケルト人は中央アジアを起源とする人々であると認識されており、その最盛期における居住地域の東端は、遠くモンゴルにまで達していたと考えられていたのである。19 世紀後半のフランスでは、そこからブルトン人はモンゴル人の末裔であるという俗説が生まれ、その俗説は 20 世紀後半まで生き残った⁷。

引用ではクレールビールの前便の内容が分からないので推測に頼るしかないが、彼はおそらくどこかでこの俗説を知り、ブルターニュの歌をめぐる議論の中でそれを話題にしたのであろう。そしてアイルランド人の血が流れるハーンは、同じケルト系ということで、それをわが身に重ね合わせたのだらう。手紙はさらにこう続く。

ご存知の通り、アイルランド語 (Erse) とスコットランド語 (Gaelic) は構造という点でよく似ています。現代ウェールズ語もそうですが、私は全部の言葉を聞いたことがありますし、ウェールズ語 (Welsh) とスコットランド語をアイルランド語との類似を頼りに理解できるというアイルランド人にも会ったことがあります。たぶん、あなたはウェールズの音楽をたくさんお持ちでしょう。それはバルドの音楽で、幾つかはドルイド起源だと言われています⁸。

ブルターニュの歌をきっかけとして、ハーンは記憶を辿りながらケルト諸語間の類縁性に思いを馳せるが、そのときハーンの脳裏にはアイルランドで過ごした子供時代の記憶も蘇っていたのだろうか。ウェールズの音楽が、すぐにバルドやドルイドに結びつくところに、当時のハーンのケルト観の一端を窺うことができよう。

ところで、肝心の『メリュジーヌ』に戻ろう。この雑誌にはフランス各地の伝承が数多く掲載されていたが、なかでもブルターニュの口頭伝承は群を抜いて多かった。ただ、ハーンがたくさんあると予告した民謡は実際には 2 篇しかなく、楽譜付きの歌に至ってはわずかに 1 篇であった。多かったのはむしろ民話で、14 篇を数えた。ニューオリンズのハーンにとって、ブルターニュはまさに「ケルト」の口頭伝承の窓口だったのである。

一方、フランスの海外領土を含む海外のものとしては、クレオール民話が 2 篇、ノルウェー民話、スロヴェニア民話、ロシア民話、アラブ民話、日本民話が 1 篇ずつあった⁹。つまりハーンはこの時点で、すでにクレオール民話や日本民話に接していたのである。なお、日本民話の内容は「こぶとり爺さん」で、西洋の民話との類似性が指摘されていた。

『メリュジヌ』の巻頭には、編者のゲドスとロランによる「読者へ」と題された一文が置かれ、続けて口頭伝承の採集がどのように行われるべきかを説く中世文学者ガストン・パリス (Gaston Paris) の一文が掲載されて、読者に向けて採集への協力が呼び掛けられていた。

『万国民衆文学』との出会い

『メリュジヌ』の次にハーンが会う重要な書物が、メゾヌーヴ書店 (Maisonneuve et Cie) が 1881 年に出版した『万国民衆文学』 (*Les littératures populaires de toutes les nations: traditions, légendes, contes, chansons, proverbes, devinettes, superstitions*) であった。この叢書は 1903 年までに全 47 巻が刊行されたが、1881 年に出版されたのは 26 巻までであった。以下の表に、その巻冊番号、著者およびタイトル、ヘルン文庫所蔵 (○印)、ブルターニュ関連 (△印) を示す。

巻番号	著者及およびタイトル	
Vol. 1.	セビヨ 『オート＝ブルターニュの口承文学』 (Paul Sébillot, <i>Littérature orale de la Haute-Bretagne</i>)	○△
Vol. 5-7.	ブラデ 『ガスコーニュの民衆詩』 (J.F. Bladé, <i>Poésies populaires de la Gascogne</i>)	○
Vol. 8.	ランスロー 『ヒトパデーシャ』 (E. Lancereau., <i>Hitopadésa</i>)	○
Vol. 9-10.	セビヨ 『オート＝ブルターニュの伝承と迷信』 (P. Sébillot, <i>Traditions et superstitions de la Haute Bretagne</i>)	○△
Vol. 11.	フルーリ 『バス＝ノルマンディーの口承文学』 (J. Fleury, <i>Littérature orale de la Basse-Normandie</i>)	○
Vol. 12.	セビヨ 『民間伝承におけるガルガンチュア』 (P. Sébillot, <i>Gargantua dans les traditions populaires</i>)	○
Vol. 13.	カルノワ 『ピカルディの口承文学』 (E. Henry Carnoy, <i>Littérature orale de la Picardie</i>)	○
Vol. 14.	ロラン 『わらべ歌と遊び』 (E. Rolland, <i>Rimes et jeux de L'Enfance</i>)	○
Vol. 15.	ヴァンソン 『バスク地方のフォークロア』 (J. Vinson, <i>Folk-lore du Pays Basque</i>)	○
Vol. 16.	オルトリー 『コルシカの民話』 (F. Ortolli, <i>Contes populaires de la Corse</i>)	○
Vol.17-18.	Vol. 17-18. ウェッケルラン 『アルザスの民謡』 (J.B. Weckerlin, <i>Chansons populaires de l'Alsace</i>)	○
Vol.19-21.	ブラデ 『ガスコーニュの民話』 (J.F. Bladé, <i>Contes populaires de la Gascogne</i>)	○
Vol. 22.	セビヨ 『オート＝ブルターニュの民俗習慣』 (P. Sébillot, <i>Coutumes populaires de la Haute-Bretagne</i>)	○△
Vol. 23.	プティット 『北西カナダのインディアン伝承』 (Émile Petitot, <i>Traditions indiennes du Canada nord-ouest</i>)	○
Vol. 24-26.	リュージェル 『バス＝ブルターニュの民話』 (F. M. Luzel, <i>Contes populaires de Basse-Bretagne</i>)	△

1883 年にこの叢書中 14 巻を手に入れたハーンは、ここから本格的に口頭伝承の採集に目覚めていく。この年、ハーンはクレービールにこの叢書をこう紹介している。

私は近いうちにヒンドゥー音楽も手に入ると期待しています。というのは、万国フォークロア・フォークロア音楽叢書の予約購読を申し込んだからです。そのうち 17 冊だけが既刊です。エルゼヴィル版です。大半がヨーロッパに関するもので、ブルターニュのものが多いですが、プロヴァンスやノルマンディーなどの音楽もあります。これからオリエントの民謡なども何冊か出るでしょう。よく考えるのですが、いつか一緒に世界の音楽付きの伝承に関する本を何か出せるかもしれませんね、この伝説に付いているのはこの音楽です、という風に紹介して。

私はいろいろな珍しい本 — サンスクリットやら、仏典やらタルムードやらペルシャやらポリネシアやフィンランドやらの文学ですが — からピックアップしたオリエントの物語のコレクションをほぼ作り終えました。これから出版社を探さなければなりません¹⁰。

どうやらハーンは、この叢書にオリエント関連の書物を期待していたようだ。最後に話題になっている「オリエントの物語のコレクション」とは、やがて『異文学遺文』として世に出ることになるテキストである。いずれの話題からも、この時期のハーンの強いオリエント趣味が見て取れる。以下は 1883 年 10 月のクレービール宛書簡である。

もしどこか公立図書館に行くことがあれば、ぜひメゾンヌーヴの素晴らしい「万国民衆文学」叢書があるかを確認してください。私はそのうち 14 冊を手に入れましたが、珍しい音楽がたくさんあります。もし見つからなければ、ときどき抜粋をお送りします。それから『メリュジーヌ』があるかどうか確認してください。私がついている 1878 年の巻は、ギリシャ舞踊の音楽を収めています。パルテノンの小壁よりも古いのです。もちろん、ご自身でご覧になる方が、私みたいな音楽にくらい人間の不完全な筆写よりもずっといいでしょう¹¹。

手紙はハーンの『万国民衆文学』と『メリュジーヌ』への変わらぬ熱中ぶりを伝える。とはいえ、ハーンとクレービールの間にはだいぶ温度差があるようだ。ひとつ前の書簡にもあるように、ハーンは明らかにクレービールとの共同作業を望んでいたが、クレービールの方はそれほど積極的ではなかったのかもしれない。

私はオリエント関係のカタログの中に、「ヴィロトー『古代エジプト音楽覚書』、パリ、メゾンヌーヴ書店、1883 年 (15 フラン)」を見つけました。どこかの公立図書館に、この本があるのではないかと思います。もしなければ、手に入れることをお勧めします。私はそれをパリから無税で購入することができます。今度メゾンヌーヴに手紙を書いてみます。この書店から私は風変りな本をたくさん手に入れています。(……) いつかあなたと共著で魅力的な音楽付きの伝承集を書けたらいいとよく考えます。各伝説にメロディーのサンプルが付いたもので、H・エドワード・クレービールの詳細な解説付きです。でもそれまでには、二人とも「有名かつ評価の高い著者」になっていなければならないでしょうね。私は何か珍しいフォークロアを提供できるでしょう¹²。

ハーンは将来的にクレービールと共著で、メゾヌーヴ書店が出版しているような民族音楽の本を書くことを考えていた。しかし彼らが紹介すべき音楽はどこにあるのか。ハーンは自分の関心を惹いたさまざまな民族音楽の情報をクレービールに送り続ける。以下は 1884 年 3 月の書簡である。

このことは、私がタイラーを読んでいたときに気づいた面白い事実を思い起こさせます。それは、オーストラリアの歌がスパルタのギリシャのコーラスと似ているということです。少なくともその構造がということです。(……) 私はグリオの故郷セネガンビアの黒人に関する新しい本を見つけて喜んでます。そこにグリオの音楽の楽譜も載っているのではないかと期待しているのです。(……) 私はこの夏珍しいアフリカ音楽をたくさん集めることができると思います。そして、西インド諸島のクレオール音楽も採集すべきだと確信しています¹³。

ハーンの口承文化への関心は、アフリカのグリオへ、さらには西インド諸島のクレオール音楽へと広がっていった。1885 年の書簡では、彼はクレオールの民俗学者ミシエ・プレヴァルの名を引きながらこう書く。

もしあなたが「ミシエ・プレヴァル」の音楽とポート＝ソングを来月中に送ってくれる時間があれば、私はそれを『メリュジーヌ』の中でしっかりと使うことができるのですが……¹⁴。

ハーンはおそらくクレオールの口頭伝承に関する何かを『メリュジーヌ』に投稿しようとしていた。この試みの顛末については明らかではないが、クレオールやグリオに対するハーンに関心はその後も衰えることはなく、1887 年にはとうとう彼を西インド諸島へと旅立たせることになる。

クレービールとの関係は、ハーンが日本に発つ直前に絶交という形で終焉を迎えるが、のちに音楽評論家として名を成したクレービールは、ベートーヴェン、ワグナー、ブラームスなどのクラシック音楽に関する少なからぬ書物を著した。その中の一冊に 1914 年刊の『アフロ＝アメリカン・フォークソング』(*Afro-American folksongs : a study in racial and national music*) という異色の書物があることは指摘しておいていいだろう。ハーンと共有した若き日の志の一端を遂げたというべきか。

ところで、ニューオリンズのハーンがクレービールと並んでよく書簡を交わした人物にオコーナー (William Douglas O'Connor) がいる。1883 年に彼に宛てた書簡で、ハーンはこう書いている。

私の知識についてのあなたの評価は、受け入れかねるものです。まともな知識という点では、私はびっくりするほど何も知らないのです。奇書や珍品を追い求めた結果、実際に知っている以上に知識があるように見せることはできますが、その仕事はどれも専門家の評価に堪えるものではありません。でも私の蔵書を見てもらいたいとは思いますが。たかだか 2 千ドルの元手しかかかっていませんが、どの本も「珍しい」ものです。私は自分が天才ではさらさらなく、月並みの才能はそれを並み以上にするためには、何か変わったことをやらなけ

ればいけないということを知っているのです、珍品博物館をでっちあげようと努めており、それで少しでも人の注意を惹きつけられればと期待しているのです¹⁵。

ハーンの言う「奇書」や「珍品」が、これまでの文脈から見て、彼がニューオリンズで入手した民俗学関係の書物を指すことは明らかだろう。この手紙はそうしたハーンの「趣味」がきわめて自覚的なものであったことを伝えている¹⁶。23歳の若者にはっきりと自分の適性を自覚させたという点で、『万国民衆文学』や『メリュジーヌ』の貢献はやはり大きかったと言うべきだろう。しかもこの時代にあつては、そうした「珍品」は実は単なる珍品にとどまらず、高邁な目的に奉仕する貴重な素材であると考えられてもいたのである。

ここでハーンが所有していたもう一冊の『メリュジーヌ』、すなわちその第2巻（1884-1885）を見よう。巻頭に掲げられた「読者へ」の中で、ゲドスとロランは、『メリュジーヌ』第1巻がフランス内外におけるフォークロアの研究の推進役となったことを誇らしげに語り、ほかならぬフランスの地理的位置、その言語の普遍性や極東にも及ぶその古来の影響力のゆえに、この雑誌こそがこの種の研究の国際的な中心になるだろうと宣言する。

そこで二人が説くのは、「人間の精神の産物に関する科学」の必要性である。彼らは E・ルナン（Ernest Renan）を引きながら、解剖学が下等動物の観察から多くの成果をあげるように、「原始的な文学の中でも最も取るに足りないものが、現代の文学者の傑作を研究する以上に人間精神の歴史について多くのことを教えてくれる¹⁷」と力説する。つまり民間伝承の収集は、それが人間の産物の中でも最も原始的なものであるがゆえに、逆に人間精神を理解するための不可欠な基礎となるのである。彼らは言う。

それゆえ、われわれの調査をフランスやヨーロッパ以外の場所に、世界のあらゆる地域に広げることに全力を尽くそう。（……）なぜなら、我々は他の人種がいかなる信仰によって生きているのか知らなかったし、知らうとしなかったのだから。（……）われわれは世界の五大陸にフォークロアの観測所のネットワークをつくり上げたいのだ。そしてその声はここに集まり、ここでひとつになるだろう。¹⁸

ニューオリンズから西インド諸島へ、さらには日本へと旅立ったハーンの背中を押していたのは、このような声だったのである。

まとめ

ハーンの民俗学的関心はフランス民俗学との出会いによって生まれた。19世紀後半のフランス民俗学は、東西の口頭伝承の採集へと人々を誘い、ハーンはその進展をニューオリンズから逐一追っていた。なかでもブルターニュは、口承文化の宝庫としてフランス民俗学をリードしていた。ハーンは1870年代末から80年代全般にかけて、『メリュジーヌ』や『万国民衆文学』、さらには『バルザス=ブレイス』を通して、相当数のブルターニュの口頭伝承に接していた。

ハーンとよく比較される W・B・イエイツ (William Butler Yeats) の最初のフォークロア関係の著作は、1888 年の『アイルランド農民の妖精物語と民話』(*Fairy and Folk Tales of the Irish Peasantry*) であり、ハーンのフランス民俗学との出会いよりも 10 年も遅い。イエイツが口頭伝承の採集を始めたとき、ハーンはすでに民俗学者としては出来上がっていたのである。

最晩年のハーンがイエイツ宛の書簡で告白したという「私にはコナハト出身の乳母がいて、妖精譚や怪談を語ってくれました。だから私はアイルランドのものを愛すべきだし、また愛しているのです¹⁹⁾」という言葉は、イエイツの仕事を知ってから、あくまでもイエイツ個人に向けて語られたものであり、ハーンと民俗学の具体的な関係とは別の次元で論じられるべきだろう。

辺境地域における口承文学の採集は、ハーンが来日する 1890 年以前からすでに世界的な流行であった。なかでもオリエントの位置は特別で、ハーンもまたオリエントに対して強い憧憬を抱いていた。そして当時はケルトもまたオリエントであった。おそらく日本に向かうハーンの胸中には、それまで西洋人が誰も成し遂げたことのない、日本の口承文化の採集という大きな野心があったことだろう。

ハーンは日本に到着してすぐに夜の物売りの声に耳を澄まし、松江に行く途中の山間の村では盆踊りに立ち会った。松江では橋や城の基礎工事に人間を埋めたという伝説に関心を抱き、さらには被差別部落に出かけて行って大黒舞を取材し、その歌詞を英訳しようと試みもした。ハーンの野心の一端はこうした行為のうちに容易に見て取ることができよう。しかし彼は文字通りの口承文化の採集を日本でまとまった形で行うことはなかった。ハーンがその才能を開花させたのは、再話文学と呼ばれる、いわば民俗学と文学の中間項のようなジャンルだった。

ハーンはおそらく文学と民俗学を通して、オリエンタリズムと中世趣味によって特徴づけられるフランスのロマン主義の影響を大きく受けていた。オリエンタリズムはハーンの日本行きを後押しし、中世趣味は来日後のハーンの文学の舞台設定に影響を与えたに違いない。その意味でハーンもまた時代の子であった。

注

1 たとえば、田中美穂「アイルランドの起源をめぐる諸研究と『ケルト』問題」、『大分工業高等専門学校紀要』第 51 号、平成 26 年 11 月を参照のこと。

2 歌集のタイトルは「ブルターニュ民謡集」の意。なおこの書物はヘルン文庫にも収められているが、ハーンがこの書物に言及している文章はなく、どのように使ったのかは分からない。

3 竹若重勝『輝け！「大学の顔」ーラフカディオ・ハーンが残した「ヘルン文庫」を巡るー』新風舎、2008 年、p. 142. 引用中 N はニューオリンズを指す。なお傍点は筆者である。

4 *The writings of Lafcadio Hearn : in sixteen volumes. Large-paper ed, v. 13, Rinsen Book, Kyoto, p. 158.*

- 5 *Ibid.*, pp. 178–179.
- 6 *Ibid.*, p. 179.
- 7 ブルターニュではよく知られた説で、1970年代の書物でも確認できるが、筆者はいまのところ他のケルト諸語地域で同様の俗説の存在を確認できていない。
- 8 The writings of Lafcadio Hearn : in sixteen volumes. Large-paper ed, v.13, Rinsen Book, Kyoto, p. 179.
- 9 いまひとつ興味深いのは、「ハーヴェー群島の神話」と題する、ワイアット・ギル師 (W. Wyatt Gill) の『南太平洋の神話と歌謡』 (*Myths and Songs from the South Pacific*, 1876) の紹介記事が3ページ半に渡って掲載されていることである。著者は『グレートブリテン島の民話』 (*Contes populaire de la Grande Bretagne*, 1875) などの著書があるブリテン島の口承文化の専門家ロワ・ブリュエール (Loys Brueyre) であった。ハーンは『異文学遺文』において、ギル師の著書にある「泉の精」を「泉の乙女」として翻案しているが、この記事によってギル師の書物を知った可能性が高い。
- 10 *Ibid.*, p. 271.
- 11 *Ibid.*, pp. 277–278.
- 12 *Ibid.*, pp. 279–280.
- 13 *Ibid.*, pp. 306–307.
- 14 *Ibid.*, p. 334.
- 15 *Ibid.*, p. 284.
- 16 徳富蘇峰は昭和10年にヘルン文庫を訪れ、同年10月10日の東京日日新聞にその訪問記を書いている。「翁が在米、在日本時代の蔵書一切合計二千四百三十五冊、内英書千三百五十二冊、佛書七百十九冊、和漢書三百六十四冊、独逸書は皆無。(……) 其の書籍は何れも有り触れたる、云はゞ月並的のものにして、別に奇書とか、珍籍とか云う可き類は、殆ど之を見出すことが出来ない。(……) 且つ其の英書中の文學に関する六百六十四冊の中にも、此れと申す可き程の物は無く、翁の英文學に関する講義の参考書杯も、我等が日常目に触れたるものばかりであると云ふも、不可なきほどだ」。蘇峰は続けて「予は此れによりてヘルン翁が、実に天才たるを見上げた。翁は凡人並の書物を読んで、非凡なる文士となった」と称賛している。『國民新聞』を主宰したことで知られるこのジャーナリストは、青年時代に東京英語学校や同志社英学校で学んでおり、英語に堪能であったことは想像に難くない。しかし仏語にどれほど通じていたか。ハーンの蔵書中の「佛書七百十九冊」について、蘇峰がもしそのタイトルのみでも理解することができていれば、その蔵書を「月並的」と一刀両断にすることはできなかったろう。
- 17 *Mélusine*, tome 2 (1884–1885), p. 2
- 18 *Ibid.*
- 19 1901年9月24日、W. B. イェイツ宛て書簡より。